



たんぽぽ

戸田市立喜沢小学校

令和5年8月25日

8,9月号

【学校の教育目標】
夢と希望をもち 未来社会を
心豊かに たくましく生きる
喜沢っ子の育成

夏の甲子園から学ぶ ー多様性・主体性・敗者復活・レジリエンスー

校長 手塚 浩

校舎に子供たちの元気な声が戻ってきました。今年は例年にも増して酷暑、猛暑という言葉が当てはまる厳しい夏となりました。8月下旬となりましたが、まだまだ日中の日差しは厳しく、ときには耐えがたいような息苦しさを感ずる日が続いています。7月は全国の平均気温が100年余りで最も高くなりました。更に東京都心では1年間に観測する猛暑日の日数が過去最多を更新している状況です。まだしばらくは熱中症警戒アラートが発表されるような危険な暑さが続くことが予想されています。児童の健康と安全を第一に考え、熱中症対策を十分に講じた上で教育活動を進めてまいります。

さて、8月の風物詩と言え夏の高校野球です。今年も甲子園で多くの熱戦が繰り広げられました。高校球児たちの無心にボールを追う姿、バットを握り好球を見逃すまいとする気迫、一人一人が流す汗と涙を見ていると、一試合一試合、一人一人違ったドラマがあり、この場所にたどりつくまでに積み上げてきた努力や思いの強さを感じました。それと同時に、同じ夢を持ちながら甲子園のグラウンドに集えなかった日本中の高校球児に思いを馳せました。

今年の決勝は、神奈川県代表の慶應高校と宮城県代表の仙台育英高校の対戦となりました。結果は慶應高校が107年ぶりに見事優勝しましたが、準優勝の仙台育英高校の選手たちの最後まで笑顔を絶やさず全力でプレーする姿にも、称賛の声が数多く寄せられました。勝敗以上に大切なこと、高校野球ならではの魅力が十分に伝わってきた試合でしたが、試合後の2校の監督、選手のコメントにも注目が集まっています。

優勝した慶應高校の森林監督は「うちが優勝することで、高校野球の新たな可能性とか多様性とか、何か示せばいいなど。常識を覆す目的で、優勝から新しいものが生まれてくれるのであれば、本当にうれしいです。高校野球の新しい姿につながる優勝だった」とインタビューに答えていました。大村選手（主将）も「高校野球の常識を変えたいとか言ってきて、笑われることやいろいろ言われることもあったが、見返して絶対日本一になると頑張ってきた。つらい思いが全部報われたと思う瞬間でした」という内容のコメントをしています。森林監督は「エンジョイ・ベースボール」を掲げ、選手の主体性・多様性を尊重する指導スタイルを貫いてきました。そのため、高校野球の常識ともいえる一律の髪型、練習時間、選手と監督の関係などの面で、外部から批判的な意見をもらうことも少なくなかったようです。しかし、「好きな野球だからこそ自分で考えないと楽しくない」という監督の信念に共感した選手たちが優勝という結果を勝ち取り、自分たちの正しさを実力で証明するとともに、「これまでの常識を変えたい」というメッセージを全国に発信することができました。

そして、準優勝した仙台育英高校の須江監督のコメントも「名言」として話題になりました。慶應高校に賛辞を送った上で「2年間で頂点、そしてあと1つの悔しさ共に味わうことができた。人生は敗者復活です。この経験を次に生かします」と述べていました。昨年の優勝からの連覇は逃しましたが、敗戦の理由を探して悔やむよりも、その目はこの経験を生かしての「次」を見据えていました。考えてみれば、人生は上手くいくときよりも、失敗したり、思い通りに行かなかつたりするときの方がはるかに多いはず。上手くいかなかつたときこそ、敗者復活の気持ちで前を向いていくことが大切ではないでしょうか。また、このコメントを聞いて「レジリエンス」という言葉が頭に浮かびました。日本語にすると「困難をしなやかに乗り越え回復する力」、更に短くすると「回復力」「しなやかさ」という言葉にも置き換えられます。困難な問題や危機的な状況、ストレスフルな環境にあって、しなやかに立ち直る力は、やり抜く力などと同様に人生を成功に導くと言われる非認知能力の一つです。特に高ストレス社会と言われる現代社会では、大人も子供も身に付けたい能力です。

スポーツはプレーヤーのみならず、観戦する側にも多くの示唆を与えてくれます。スポーツ観戦を通して、スポーツが有する素晴らしさや可能性を楽しむとともに、「こうでなければならぬ」という固定観念に囚われず、新たな価値感や多様な在り方・方法等についても柔軟に探ったり、考えたりしていくことが大切なのではないかと感じました。